

## 古代畿外寺社の存在形態

東北大学大学院文学研究科博士後期課程 五十嵐健太

古代の神社には宮司、神主、祢宜、祝部などさまざまな神職が存在した。このうち、本報告では宮司を取り上げる。

宮司をめぐるのは「神主も神宮司も共に神社あるいは神宮における神職の長ともいうべき地位にあつて、神主と神宮司は並置されない」という林陸朗氏の指摘が現在でも通説の位置を占めている（林陸朗「上代神職制度の一考察」、『神道学』二十九、一九六一年）。

しかし近年、加瀬直弥氏が宮司は「大神宮に関わる地域の行政などを担う」ことを明らかにした（加瀬直弥『古代の神社と神職』、吉川弘文館、二〇一八年）。この指摘は「宮司」という名称や諸史料の記述から首肯できるものである。しかし宮司と神主の畿内・畿外の棲み分け、宮司が掌る行政の具体相についての言及がないので、検討の必要がある。

以上が神職としての宮司をめぐる問題であるが、これまでの宮司研究が看過してきた宮司の寺院行政に着目したい。

たとえば年分度者が認められていた畿外の神宮寺にはすべて宮司が存在しており、年分度者の試度、神宮寺管理に宮司が関与していたことが確認でき（『類聚三代格』天長七年七月十一日官符、天安三年二月十六日官符）、宮司と神宮寺の密接な関係を示唆する。

また宗像宮司は、宗像神に菩薩位が与えられたことを契機に設置され、「執印勤行」を職務とされた（『類聚符宣抄』天元二年二月十四日官符）。以上のような宮司の特徴を検討することで、古代地方寺社の相互関係を明らかにしたい。